「患者さん自身がどうしたいのか」に、とことんこだわり
言語化するクリニックが存在するという「希望」

瀬戸山陽子　医科大学・教員

驚いたこと

「やりたい医療」と「入院中心の日本の精神医療」は両立しない、と思って親御さんから引き継いだ病院を閉じることを決めていた、熊さん、熊田貴之 doctor。制度の中に浸かると、やりたい医療を考えることさえ、時に大きなエネルギーがいると感じます。今回のお話では、それでも、「やりたい医療」にこだわって、「患者さん自身がどうしたいのか」をとことん追求して実践する精神科のクリニックがあることに、素直にとても驚きました。

絶妙なバランス感覚

印象的だったのは、理論的な裏付けと現場で起きていることを言語化して行ったり来たりする「鳥の目」と「虫の目」です。また、理論と実践、理想と現実、自由と責任など、要所要所に絶妙なバランス感覚を感じました。経営的な視点から緻密な計算をしつつ努めてスタッフ間の共通認識を作ったり、その一方で任せるところは現場に任せるような姿勢も。さらに理事長で1医師の熊さんおひとりの中だけでなく、薬剤師の副院長・國岡さん、PSWの副院長中村さんとの関係性にもまた、バランスの良さを感じていました。

最後に MSW の佐原まちこさんが質問されていたことは私もとても気になったことです。どうやって、こういった考えと行動力とバランス感覚を身につけられたんだろう…ということ。そこにはアタッチメントが関係しているけれど、詳しくは放課後で…ということでした。残念ながら放課後は参加できていなかったので、そんなお話もまたどこかで伺えたらと、勝手に思っています。

精神科医療の希望

「精神科医療には暗い話が多い中、希望を感じた」・・と最後に丸木先生が仰っておられましたが、私も同感でした。熊さんは前段のゼミで、「自分たちは 2 割の上澄みで、8 割の人たちは変わらない」と話されています。しかし数は少なくても、現にこんな精神科クリニックが存在することを教えて頂きましたし、2 割の中の方々がこんな風に自分たちの医療を言語化して外に伝えてくださることにも、可能性を感じました。

ゆきさんの「乃木坂スクール」のゲスト講師のお話を伺うと、いつも「学生と一緒に聞きたい、学生はどう思うだろうか」と考えてしまうのですが、今回も心からそんな思いになりました。
それは、耳あたりの良い「スローガンだけの患者中心」ではなく、真に「患者さん自身がどうしたいのか」にとことんこだわった精神科医療の話を伺えたからです。この話には、大きな「希望」を感じています。ほんとうに貴重なお話ありがとうございました。